

滑稽話集 Das Rollwagenbüchlin における Landsknecht の話・注解

大 島 浩 英

Erläuterungen zu den Geschichten von Landsknechten im
„Rollwagenbüchlin“

OSHIMA Hirohide

はじめに

本稿で取り上げた „Das Rollwagenbüchlin“ は1555年に出版された滑稽話集（初版）である。この書物に収められているような Schwank と呼ばれる滑稽話は16世紀のドイツで数多く出版されているが、Schwank [schwingen] とは、「韻文または散文で書かれ、面白おかしい着想やコミカルな出来事を一つの急所に集約するか、やや長くても短編小説的な体裁をとった、簡潔で逸話風の物語。粗野で卑猥な内容のものもあれば、教訓的傾向をもつものもある¹⁾」、と説明される。従って限定された知識階級の言語ではなく一般庶民にも理解される言語で書かれたものであるため、当時の自然な言語状況を知る資料として適したものであると考えられる。さてここで、この滑稽話集の著者 Georg Wickram について触れておくと、Wickram は1505年 Elsaß の Kolmar に生まれ、後に同地の裁判所書記 (Gerichtsschreiber)、晩年は Burkheim (Freiburg と Kolmar の中間) の市書記 (Stadtschreiber) の職にあった。熱心なプロテスタントであったためカトリックの町 Kolmar を去ったと言われている。宗教改革の時代をプロテスタントとして生きた Wickram の生い立ちはこの著作においても重要な背景となっているように思われる。さてこの Schwank 集の初版本には67の話が収められており、その中には農民、聖職者、傭兵、商人、職人などの登場人物を扱った話があるが、それらのうち本稿では傭兵が登場する Schwank 第14話 (S. 30~32) に²⁾絞^り、そこに描かれている内容に関して下線を施した部分を中心に語学的側面、意味的および社会史的側面から考察を加えたい。(下線、[] は筆者)

使用テキスト：

Wickram, Georg: Das Rollwagenbüchlin (1555). Text nach der Ausgabe von Johannes Bolte. (Reclam) Stuttgart 1968.

(現代語訳 Steiner, Gerhard: Jörg Wickram・Das Rollwagenbüchlein. Berlin 1957.)

I

I.1. Von zweyen lantzknechten, die mit einander in krieg zohen.

一緒に出征した二人の傭兵について

・landsknechten:

さてこの表題では共に戦場に赴く二人の傭兵がテーマに取り上げられているが、ここでまずこの物語を理解するために当時の「傭兵=frnhd. lantzknechte [nhd. Landsknechte]」がどのような存在であったのかについて考えてみる。Landsknechte に関しては一般的に次のような解説が見られる。

Landsknechte: ursprl. seit dem 15. Jh. die zu Fuß kämpfenden dt. Söldner, die die Ritterheere ablösten. (Meyers großes Taschenlexikon)

Landsknechte: im Gegensatz zu den Schweizer Fußtruppen Bezeichnung für die vom späten 15. bis zum Ende des 16. Jh. in „Ksl. Landen“ angeworbenen Fußsöldner. Schon früh ist die Umdeutung „Lanzknecht“ belegt. (Lexikon des Mittelalters)

Landsknechte について Meyer の事典には、15世紀以来徒歩で戦った傭兵で騎士の軍隊に取って代わった兵隊という記述が見られる。³⁾ また「中世事典」では、皇帝の土地、つまり現在のドイツの前身である神聖ローマ帝国領内で徴募された歩兵であるとする説明がなされており、類似した語形の Lanzknecht との混同についても言及されている。⁴⁾ 15世紀までのヨーロッパの戦争では、君主によって与えられた土地（領地）と引き替えに騎士階級が戦闘の義務を負っていたと言われるが、重武装のため機動力を失った騎士部隊に対して、いし弓、長弓、長槍を持った歩兵の密集部隊（現金をもらって戦う大量の歩兵）の方が優勢となり、一騎打ちの勝敗の足し算で全体の勝敗が決まるという戦術はこの時代ではもはや通用しなくなったと考えられている。⁵⁾

数多くの傭兵をヨーロッパ各地に送り出したことではスイスがよく知られているが、その理由としてまずスイスが山岳地方であることが挙げられる。耕地面積が極端に少なく、耕す土地を持たない男性たちの多くが傭兵として出稼ぎに出て生計を立てたと言われている。このようなスイス傭兵部隊とドイツの Landsknechte 部隊との根本的な相違は、スイス傭兵部隊の場合、国の重要産業として国家が管理し組織した部隊であったのに対し、ドイ

ツの Landsknechte 組織は、没落した騎士貴族が個人の戦争企業家となり、自ら傭兵隊長として傭兵を集め、戦時にはそれを王侯たちに売りつけて利益を得るという私企業の経済活動として行われていたという点である。また、Landsknechte が誕生したのはドイツ南西部であるが、この地域にはバイエルン、ハプスブルク家のオーストリアを除いては有力な諸侯がおらず、弱小領邦 (das Land) の密集地であった。土地が肥えていたため人口が多く、農家の次男、三男には耕す土地がないことから傭兵となった者、あるいはこれらの一部が都市に流れ込み、都市の下層階級が膨張してそこから押し出される形で傭兵になった者も多くいたと言われている。⁶⁾

さて前述のように Landsknecht は、Lanzknecht という語形で別の解釈がなされることもある。この Lanzknecht という語形は Lanze (騎士槍) と Knecht (兵士) を組み合わせた造語とも解されるが、実際に Landsknecht が用いたのは Lanze ではなく歩兵の長槍 (die langen spiese)⁷⁾ であったため、Lanze を携えた Knecht という解釈は成り立たない。さらにこの語の語源に関しては、山岳出身のスイス兵と区別して平らな土地 (Land) から来た Knecht (兵士) (チロルなど山岳地方出身の兵士もいた)、国土 (Land) を防衛する兵士 (当時に国土、祖国といった概念があったかは疑問)、田舎 (Land) で徴募された兵士 (都市出身者も多くいた)、ドイツ領内から集めた兵士、あるいは低地ドイツ語の lantknechte⁸⁾ (獄吏、廷吏) を指す、などの説があるがまだどれも確定的なものではない。また、中世低地ドイツ語には landesknecht: Bewaffneter zu Fuss (im Dienst eines Landesfürsten)⁹⁾ 「領邦君主に臣従する歩兵」という説明も見られる。¹⁰⁾

・ zohen:

さて語学的には、in krieg zohen の zohen に見られる h-g 間の文法的子音交替について、この場合複数過去形においても mhd. zugen のようにはならず、zohen のまま子音に交替が起こっていない点が注目される。

I. 2. Zwen gūt gesellen zohen mit einander in krieg; und als es sich dann offt begibt, wenn man gemustert unnd die knecht geschworen haben, daß man die fenlin verschicket, eins hieher, das ander dort außhin, also kamen dise zwen gesellen auch von einander, daß sy lang nit zůsamenkamen, biß daß ein schlacht geschach unnd die haufen geurlaubt wurden.

二人の気のいい若者が共に出征した。そしてよくあるように、徴兵検査を済ませて傭兵たちが宣誓をすると、ある部隊はこちらへ、また別の部隊はあちらへと派遣された。それでこの二人の若者もまた互いに離れ離れになり、その結果、戦闘が行われて部隊が解雇されるまで長い間彼らは互いに会うことはなかった。

・ *zwen gūt gesellen*:

まずここでは、出征して行く二人の若者 (*gesellen*) に対して *gūt* という形容詞が添えられている。この形容詞は「気のいい、善良な」といった意味で解釈できるものと思われるが、これと類似して „*Ein gūter junger gesell* (S. 45)“, „*ein gūter junger lantzknecht* (S. 65)“ など同様の例がここで挙げたものも含めて12例見つかっている。¹¹⁾ 前述のように *Landsknecht* となった若者には、南ドイツの人口増加に伴って耕す土地を持たない農村出身者、小作農民、また徒弟、職人など都市部の下層階級出身者が多くいた。これらの人々の中には反体制派でさらに宗教改革支持者が多数いたため、熱心なプロテスタントであり封建勢力に批判的であった *Wickram* は *gūt* という形容詞を *gesell* や *landsknecht* という下層民を表す語に添えることによって、これらの人々を粗野な暴徒ではなく善良な民衆として好意的に描いているのではないかと思われる。¹²⁾

・ *gemustert [hat]* :

この文では完了の助動詞 *hat* が省略されており、その後に続く *daß man die fenlin verschicket [hat]* にも同様の現象が見られるが、このように副文内における完了助動詞の省略は頻繁に行われるもので、これはこの時代のテキストにおける特徴的現象であると考えられる。さて、出征したこれらの若者は徴兵検査 (*gemustert*) を受けることになるのだが、この当時の募兵について *Baumann* は次のように述べている。募兵の際には、派手な衣装で笛や太鼓を打ち鳴らしながら村や町を練り歩き、一種の「見世物興行」をやる。書記係が募兵リストに応募者の洗礼名、苗字、出身地を書き込み、傭兵志願者は手付け金 (40 *Kreuzer*) を受け取る。そしてこの瞬間から兵役義務が生じる。またこの手付け金は、遠隔地にある閲兵場への路銀で、途中、兵士たちが盗みを働かないためのものであった。閲兵場に着くといわれるのが査閲であるが、その際には健康、能力の検査の他に、自前で持参する武器も品定めの対象となった。優れた武器を持っていればその分給金も高くなるというわけである。実際に査閲の際には武具の貸し借りによる査定のごまかしが横行し、あるいは *Landsknecht* にはなり得ないような女性や子供までもが兵士の格好をして検査を受けさせられ、兵員数を水増しすることでその分増加した支払い給金を傭兵隊長 (連隊長) が傭兵部隊の雇い主であるドイツ諸侯に高く請求し、実際には存在しない兵士の分の給金を自らの利益にしていたとも言われている。ドイツでは傭兵隊長は個人の戦争企業家であったため、傭兵部隊の編成によって自らの利益を追求することが何よりも優先されたのであろう。

・ *wenn [...] die knecht geschworen haben*:

knecht の複数語尾 *e* が脱落する語末音消失 (*Apokope*) がここには見られる。これは初期新高ドイツ語時代の上部ドイツ語地域 (ドイツ中南部) では頻繁に見られた現象で、これも前述の副文内における完了助動詞の省略と並んでこの時代に書かれたテキストの特徴

であると言えよう。またこの現象は名詞に限らず形容詞の格変化語尾 (der reich[e], der arm[e] など) や、動詞の過去形語尾 (spottet[e], antwortet[e] など) にも見られ、特に後者の場合現在人称変化形と同形となるため、この混同を避けるため南ドイツでは完了形が発達したとする考えもある。

さて、査閲に引き続いて行われるのが宣誓 (geschworen) である。ここでは軍人服務規程が朗読され、傭兵志願者はその規程を遵守することを宣誓した。この軍人服務規程には忠誠の誓いと軍法が記されているのだが、軍規違反や無法行為を罰するため、手付け金の給付時からすでに軍人服務規程遵守の予備宣誓が行われ、この規程が早い段階から適用されていたとも言われている。¹³⁾

・ die fenlin:

現代語の Fähnlein に対応するこの語は Meyers Lexikon によれば、„im 16. und 17. Jh. unter einer Fahne zusammengeschlossener Truppenteil von 300~600 Fußvolk oder Reitern.“、つまりある一つの旗の下に編成された歩兵部隊と説明されるもので、この旗 (die fenlin) という語に傭兵部隊全体を象徴させて用いられている。ちなみにこの象徴的な旗を持つ部隊の花形である旗手の月給は10 Gulden、一般の兵士でも 4 Gulden の給金が与えられたと言われている。この 4 Gulden という金額は当時では職人の親方の給金に相当する額であったため、これを考え合わせると傭兵という職業は貧困層にとって非常に魅力的な稼業であったと言えるだろう。

・ eins hieher, das ander dort außhin:

さて、査閲と宣誓を済ませて傭兵となった二人の若者がばらばらに送り込まれた先の戦地を考える場合、特にこの時代の特殊事情としてまずルターの宗教改革が想起される。この改革以後、南ドイツの農民戦争 (1524) をはじめ、新教、旧教の対立が激化し、宗派の違う各領邦間での戦闘に Landsknecht が駆り出されることが多かったという状況がある。このことは、テキストを理解するための背景として同時に考え合わせることができるものかもしれない。

・ biß daß:

現代語では bis は、その後の daß が省略され bis のみで従属接続詞として用いられるが、原文では biß は daß に導かれる名詞節をとっているため、この場合の biß には前置詞的な性格があったものと考えられる。

・ geurlaubt wurden:

原文の geurlaubt は、verabschieden 「解任する」、entlassen 「解雇する」の意味をもつ mhd. urlouben の過去分詞形として用いられたもので、現代語ではこの意味を表す場合前綴り be- を付加した beurlauben が用いられる。be- をもたない nhd. urlauben 「休暇をとる」には上述の意味はもはや認められず、また urlouben に be- を付加した前綴り動詞も Mhd.

には見当たらない。

II

II. 1. Als sy aber im heimziehen waren, kamen sy auff der straß ungeferlich wider z^ousammen unnd reißten also ein tag oder zwen mit einander. In dem sich vil reden zwi-schen inn begaben, wie es eim yeden gangen war.

しかし彼らが帰郷する途中、彼らは偶然に道で再会し、そこで一日、二日をともに旅して歩いた。その間に、それぞれの身に何が起こったのかということが彼らの間で多く語られた。

・ im heimziehen waren:

ここでは前置詞句と sein 動詞による状態の表現が用いられているが、Steiner はこの箇所を „Als sie aber nach Hause zogen,¹⁴⁾” という動作の表現で現代語に訳している。

このように状態の表現が現代語では動作（状態変化）表現に訳されるという例は1515年¹⁵⁾に出版された民衆本 „Dil Ulenspiegel“ にも見られ、時代によって好まれる表現形式の違いが見て取れる。

・ ungeferlich:

原文では Ungefähr「偶然」という名詞に形容詞語尾 -lich を付加し、現代語の „von ungefähr“「偶然に」という意味で用いられているが現代語にはこの用法はなく、現代語では gefährlich「危険な」という形容詞に接頭辞 un- を付加して „ungefährlich“「危険のない」という否定的意味を作り出しているため、現代語との間で造語法と意味のずれが見られる。

・ In dem:

この in dem は副詞 indem（=indessen「その間に」）として用いられているものと思われるが、これに続くべき定動詞が後置されているため in dem が従属接続詞のように作用し、結果として主節に相応する部分がこの文にはない。

・ gängen war:

現在 ge- は完了を表す指標として過去分詞に原則的に添えられるが、中高ドイツ語ではそれ自身に完了的意味をもつ gekommen, gefunden などに ge- は不要で付加されていなかった。しかしここに挙げた gängen やあるいは glauben のように完了的な意味をもたない語にも ge- が添えられていないのは、語頭音が g-, k- で始まる動詞の過去分詞では、これらの語頭音と ge- が同化し、結果的に ge- が脱落したような形が現れたためと思われる。¹⁶⁾

II. 2. Es was aber der ein seer reich worden, vil gelts und kleinot überkommen, der ander hat gar nichts. Deßhalb der reich sein spottet und sprach: „Wie hast du im doch gethon, daß du so gar nichts hast überkommen?“ Der arm antwortet und sprach: „Ich hab mich meiner besöldung beholffen, nit gespilt, noch den armen bauren das iren genommen; sy haben mich zû übel gedurt.“

一方は非常に金持ちになり、多くのお金や宝石を手に入れたが、もう一方は何も持っていなかった。それ故に金持ちの方が嘲笑して言った。「何も手に入れなかったなんてお前は何かをしていたのだ。」貧しい方の男は答えた。「私は自分の給金でやりくりしたんだ、遊ぶこともせず、貧しい百姓からかれらの持ち物を奪うこともしなかった。かれらがひどく気の毒に思えたんだ。」

・ was:

gangen war の過去分詞 war や、es was の was に見られるように、このテキストには mhd. sin/wesen の過去形として was と war が並存しており、文法的子音交替の平均化に揺れが生じているのがわかる。

・ reich worden:

現代語では本動詞として用いられた werden の過去分詞には ge- が添えられるが、werden はそれ自身に完了的意味をもっているためここでは ge- が付加されていない。

・ vil gelts:

vil (= nhd. viel) はここでは現在のような形容詞ではなく名詞と考えられており、この名詞 vil に具体的な「物」が2格でかかるという Mhd. での用法が、このテキストの書かれた初期新高ドイツ語時代においても用いられている。

・ überkommen:

この語は動詞としては主に「(感覚、感情が) 襲う」という意味で現在用いられるが、ここでは前綴りを be- に交換して bekommen の意味で使われている。この意味に近いと思われる「受け継ぐ」は現在では過去分詞形容詞としての überkommen に見られ、動詞としては古く感じられるようになっている。

・ sy haben mich zû übel gedurt:

ここでは片方の傭兵が農民に対して哀れみの感情 (gedurt [= nhd. gedauert]) を抱いていることが読み取れるが、前述のように当時の傭兵の中には、農家出身の耕す土地を持っていない若者が多く含まれていたという事実もあることから、このテキストに描かれた傭兵も同様の境遇であったことが推測される。

II. 3. Diser sprach: „So hör ich wol, du bist der krieg̃er einer, denen Joannes in der wüſte prediget, sy solten sich an irem sold benügen lassen.“ „Der arm antwortet: „Ja, ich meint, es were nit übel gethan.“

金持ちの方が言った。「なるほど。お前は、荒野でヨハネが、自分の給料で満足せよ、と説教をした兵士たちの1人なんだな。」貧しい方が答えた。「ああ、あの説教は間違っていないと思うよ。」

・ diser:

指示代名詞 dieser は現代語では、この語の前に述べられた部分に含まれる2つの名詞、前者、後者のうち直前にある名詞、つまり後者にあたる語を指すが、ここでは直前に発言した兵士ではなくさらにその前の発言者である金持ちになった方の兵士を受けており、指示する対象が現代語とは異なっている。そのため Steiner の現代語訳ではこの部分は dieser ではなく der andere という表現に改められている。

・ sy solten sich an irem sold benügen lassen. :

この箇所はルカによる福音書3章14節 Lukas 3. 14. „Beraubt und erpreßt niemand und seid mit eurem Sold zufrieden!“¹⁷⁾ 「人をおどかしたり、だまし取ったりしてはいけない。自分の給与で満足していなさい。」からの引用である。この時代の傭兵は原則的には4 Guldenの給料を受け取っていたとされるが、実際には給料の遅配、未払い、あるいは布、衣装用品、具足などによる現物支給が恒常化していたとも言われている。¹⁸⁾ つまり生活してゆくためには不安定な傭兵の給料だけに頼るわけにはいかないため、そこで傭兵たちが半ば公然と行ったのが侵略した土地での「略奪」であった。

・ es were nit übel gethan:

これは略奪をしなかった貧しい方の傭兵の発言だが、この時代の兵士には自明のものとされていた略奪の権利を当然のことと行使した傭兵と、あえてそれを拒否した傭兵との対置という設定を通して Wickram は、戦乱の絶えないこの宗教改革の時代に熱心なプロテスタントとしての信仰心と倫理観を聖書の言葉を借りて訴えたのかもしれない。

II. 4. Der ander sprach: „Ach nein, mein lieber brüder, dieselbig zeit ist nūmen, es gadt yetz anderst zū. Wenn du wilt barmhertzig sein und nit drauff greiffen, überkompst dein lebtag nichts; du müßt im thun, wie ich im gethan hab. Ich hab mich nit gsaumt mis kistenfāgen und andren rencken; du müßt es nemmen, wo dūs findest, und dir niemants lassen zū lieb sein.“ Der arm gedacht der red nach.

金持ちの方が言った。「いや、お前、それは違うぞ。こんな機会は二度とない。今は事情が違うんだぞ。情に流されて手を出さなければ、お前は生涯何も手に入れることはでき

ないぞ。俺がやったようにお前もしなければいけない。おれは箱そうじ（略奪）や他人をだますことをためらったことなどない。お前もそれ（金品）を見つけたら奪い取るんだ。誰にも同情してはいけない。」貧しい方の男はこの話をよく考えてみた。

・ yetz anderst:

「今は事情が違う」と略奪を正当化し、もう一人の貧しい傭兵に対して略奪を勧める金持ち傭兵の発言は、先に引用した聖書の時代とはまったく違う現実の社会、戦乱と宗教対立が激化していたこの時代の人々の偽らざる本音なのかもしれない。実際、当時の戦争は一種の経済行為で、侵略した土地から戦利品（ここには領主の所有物と見なされていた住民も含まれる）を根こそぎ奪うことも、ある意味では労働に対する正当な報酬と考えられ、また略奪や破壊行為は、抵抗した都市に対する処罰として正当化されていたという報告もある。¹⁹⁾

・ wenn du wilt [...] sein und [...] greiffen:

ここでは wenn に導かれる副文内で定動詞の後置が行われず、むしろこの wenn は語順に影響しない並列接続詞のように使われているため、後に続く主節への従属性がこの副文に関しては弱まっているように思われる。

III

III. 1. Es begab sich, daß sy zu nacht in ein kammer schlaffen gewisen wurden, und der arm hat acht, wo der reich sein seckel und kleinot hinlegt, stünd in aller stille umb mittnacht auf und erwütscht auß des reichen fäschen ein guldin kettlein unnd etwan für zehen gulden müntz, macht sich mit dem darvon vor tag.

二人は夜同じ部屋で寝るように言われ、そして貧しい方の男は、金持ちの男が彼の財布と宝石をどこへ置くのかに注意していた。皆が寝静まった真夜中に貧しい方の男は起きだして、そして金持ちの袋から金の鎖と約10グルデンの金貨をひつつかんで、夜明け前にそこから立ち去った。

・ in ein kammer:

戦争が終わり除隊した兵士はその時点で失業者となるわけで、生計を立てる手段を失った傭兵たちは、平時にもかかわらず強盗、追い剥ぎあるいは殺人、放火などの暴虐、違法行為を行う社会秩序を乱す厄介者の集団となる。もちろん当局も除隊兵士は即刻帰郷するようにという命令を出し、従わぬ者を取り締まろうとするのだが、そんな中で禁令を犯してまで除隊兵士を宿に泊め、かくまったのは「宿屋の亭主」であったと言われる。²⁰⁾ このテ

クストで、一つの同じ部屋に泊められた二人の傭兵についても同様の事情があったものと考えられる。

III. 2. Do es aber tag ward, erwachet sein gesell unnd fand seinen brüder nit, gedacht gleich, es wirt nit recht zügen, unnd ergreiff seine bulgen, lügt; so manglet er der ketten unnd des gelts. Darumb er seim gesellen auff dem fuß nacheylet und ergreiff in zu Nürnberg, liesse in da gefencklich annemmen.

さて夜が明けた時、金持ちの男は目を覚ましたが、彼の相棒の姿を見つけることはなかった。金持ちの男は様子がおかしいことにすぐに気づき、自分の袋をつかんで中をのぞいた。鎖とお金が彼のもとからなくなっていた。そこで彼は相棒の足取りを追いかけ、ニュルンベルクで捕らえ、その相棒は投獄された。

・ ergreift:

この ergreift は強変化動詞 mhd. ergrifen の3人称単数過去 ergreif のことと思われるが、ここではさらに語尾に t が付加されている。このすぐ後には同じ3人称単数過去として ergreiff という形も用いられているため、この語尾の t は誤記か、あるいは規則変化動詞の過去形語尾 -te の e が語末音消失したものとも考えられる。動詞変化の規則性には同時代においても何らかの揺れが生じていたものと思われる。

・ so manglet er der ketten unnd des gelts. :

= Ihm mangelten die Kette und das Geld. (現代語) このように、原文での mangeln は「人」を1格の主語として文を構成しているが、これに対して現代語では「人」を3格とし、そして欠如している対象物を主格ととらえる把握の仕方に変化している。

・ darumb:

前述の in dem 同様、この darumb (= nhd. darum) も副詞ではあるが、それに続く定動詞が後置され従属接続詞的な語順になっており、また、wenn が並列接続詞的に用いられた例もこのテキストには見られたことなどから、この文献では副詞、従属接続詞と語順との関係整備がまだ進んでいないことがわかる。

・ Nürnberg:

ここで Nürnberg という特定の地名が現れるが、Nürnberg は当時帝国自由都市(直轄都市)で経済、文化の中心地であった。印刷出版も盛んで1500年頃には A. デューラー、H. ザックスなどが活躍した都市としてよく知られている。また1450年より職匠歌の中心的学校も設立され、²¹⁾1524年には宗教改革を受け入れプロテスタントの町となっている。熱心なプロテスタントであった Wickram の文学活動において Nürnberg は非常に重要な意味をもつ町であったように思われる。

IV

IV. 1. Und als ein ersamer radt den gefangnen zû red stalt, warumb er dem die ketten sampt dem gelt entragen hette, gabe er antwort: „Er hats mich geheissen.“ Der ander verneinets, er hetts in nit geheissen; diser bestünd, er hetts in geheissen. Nun die herren begereten ein rechten bericht vom armen, wie ers in geheissen hett.

さて名誉ある市参事会員がこの囚人に、なぜお金ともども鎖を彼から奪ったのかを尋ねた時に、囚人は答えた。「あいつが私にそれを命じたのです」。もう一人の方が、自分はそれを彼に命じてなどいないと否定した。この男（貧しい方の囚人）は、彼が自分にそれを命じたと主張した。それで市参事会員たちは貧しい方の男から、金持ちの男が貧しい方の男にどのように命じたのかについての正確な報告を求めた。

・ diser:

ここでの diser も直前の発言者 der ander（金持ちになった傭兵）ではなく、さらにその前に発言している囚人となった傭兵を指している。直前という意味では der ander の発話文中の人称代名詞 in（囚人となった傭兵）を受けるという可能性もあるが、Steiner はこの diser を jener（前者）に置き換えて現代語に訳しており、jener – dieser で把握される関係が時代により変化している可能性が考えられる。²²⁾

IV. 2. Do erzellet der arm, wie er im hette ein leer geben, er solte thûn, wie er im gethon hette, er solt kein barmhertzigkeit mit niemant han, sunder solts nemmen, wo ers funde; er hett im auch also gethan, so hette ers nienen baß können bekommen und belder dann bey seim gesellen, der bey im in der kammer gelegen were.

そこで貧しい方の男は、金持ちの男が彼にどのような教えを与えたのかを述べた。その教えとは、貧しい方の男は、金持ちの男がやったようにやれ、誰に対しても同情心など持たずに、見つけたらとれ、というものだった。貧しい方の男は金持ちの男に対して教え通りにし、そうして彼は、部屋の中でとなりに横たわっている相棒から他のどこよりもうまく、そして素早くそれ（金品）を手に入れることができた。

・ erzellet:

これは現代語 erzählen の過去形 erzählte に対応するものだが、この場合の過去形規則変化語尾が -et となっており、これは英語型の過去形語尾 -ed に相当するものと考えられる。このテキストには他に prediget, erwachtet, nacheylet など同様の語尾をもつ過去形が見られる。

・ funde:

この語は mhd. vinden の接続法過去単数 vünde と同じものと考えられ、Nhd. では fände という形で用いられる。現在においても過去形と接続法過去とで変音する母音が異なっているものには stünde (stand)、stürbe (starb)、würfe (warf) などがあるが、finden の場合、fünde という形が現在では用いられなくなり fände が接続法過去の形として定着しているのに対し、stehen、werfen については、Mhd. の直説法過去複数変化の幹母音をもつ stünde、würfe がそれぞれ現在では定着し、stände、würfe の方がむしろ後退するという逆の現象が見られる。²³⁾

・ belder:

これは現代語 bald の比較級 bälder であるが、現在では bald を比較級の形にすることはあまりなく、bälder を eher で代用することが多い。

・ were:

ここでは liegen が完了時称において sein 支配となっており、南部地域の特徴が見られる。これに対して Steiner の現代語訳では hätte が用いられている。

IV. 3. Also erkannten die herren, er solt im die kettin widergeben unnd er das gelt behalten, damit er wider heim möcht zerung haben, und diser solt keinen also mer leeren reich werden.²⁴⁾

そこで市参事会員たちは判決を下した。その判決は、貧しい方の男は金持ちの男に鎖を返して、お金は貧しい方の男が再度の帰郷の際に費用を持っておくことができるように取っておくべし、そしてこの男（金持ちの男）は、金持ちになる方法を誰にも二度と教えてはいけない、というものであった。

・ heim: 「故郷への道中」 [= auf seinem Heimweg]

このテキストでは共に出征して Landsknechte となった若者が、戦争が終わって帰郷する際に再会するという設定であった。前述のように、除隊後は速やかに故郷に帰るべしという命令が雇い主の王侯（皇帝）によって出されてはいたものの、これは Landsknechte がそれぞれの故郷でまっとうな職場と住居を持っており、除隊後はまた故郷で以前の状況に復帰できるということを前提とした命令であって、実際には故郷で生活するすべがないために傭兵となった者がほとんどであったから、除隊後に命令通り帰郷する者は少数しかいなかった。そして帰郷できないまま他の領地を強盗、略奪しながら浮浪する者が多かったのは先に述べた通りである。そしてこのような除隊兵士問題が後の絶対主義国家における常備軍創設の一因になったものと考えられる。

おわりに

以上、16世紀のドイツにおける傭兵を扱った Schwank の一つを考察してきたが、語学的側面に関してはここで触れることができなかった問題もまだ多くあり、また内容面についても調べるべき点が多々残されている。今後さらにこの Schwank 集に収められている傭兵の話を始めその他の物語をも資料として、当時の言語状況、社会的背景をさらに分析することによりテキストの理解を深めたい。

注

- 1) 名古屋初期新高ドイツ語研究会訳：「道中よもやま話」講談社 2001. S. 270 f.
- 2) この Schwank 集には傭兵を扱ったものとして、第7話、第14話、第15話、24話、第40話、第42話、43話、44話などがある。
- 3) Meyers großes Taschenlexikon in 25 Bänden. 7 Aufl. Mannheim 1999. Bd. 13. S. 41.
- 4) Lexikon des Mittelalters. Stuttgart-Weimar 1999. Bd. V. S. 1679.
Trübner にも同様の解説があり、Landsknecht、Lanzknecht の初出はそれぞれ1486年、1502年という記述がある。(Trübners Deutsches Wörterbuch. Begr. von A. Götze, hg. von W. Mitzka. 8 Bde. Berlin 1939-1957. Bd. 4. S. 361.)
- 5) Reinhard Baumann (菊池良生訳)：「ドイツ傭兵の文化史」新評論 2002. S. 5 f.
- 6) 菊池良生：「傭兵の二千年史」講談社 2002. S. 74, 89.
- 7) Grimm, J. / Grimm, W. : Deutsches Wörterbuch. 33 Bde. Leipzig 1854-1971. (dtv 5945) Bd. 12. S. 137.
- 8) Reinhard Baumann: a. a. O., S. 68.
- 9) August Lübben: Mittelniederdeutsches Handwörterbuch. Darmstadt 1995. S. 196.
- 10) Landsman (同郷の人) — Landman (農夫) といった造語法の違いが語義の相違に反映された現代語の例もある。
- 11) „ein armer einfacher lantzknacht“ (S. 32), „Der gũt hach [= Kerl, Bursch]“ (S. 66), „der gũt gesell“ (S. 66), „Der gũt brüder Veit [= Landsknecht]“ (S. 66), „Der gũt kärle“ (S. 67), „Der gũt arm tropff“ (S. 67), „Der gũt kriegßmann“ (S. 71), „dem gũten lantzknacht“ (S. 71), „der gũt lantzknacht“ (S. 74) など。
- 12) 知識層に属する村の学校教師などが募兵に応じたという例も報告されている。鈴木直志：「ヨーロッパの傭兵」山川出版社 2003. S. 18.
- 13) Reinhard Baumann: a. a. O., S. 83.
- 14) Steiner, Gerhard: Jörg Wickram · Das Rollwagenbüchlein. Berlin 1957. S. 35.
- 15) 原文：Der Bäcker waz ein schimpfig Mann und waz zornig [...] (S. 58)
現代語訳：Der Bäcker war ein leicht erregbarer Mann, er wurde zornig [...] (S. 169)
原文：Da waz er aber ein Bäckrknecht. (S. 60)
現代語訳：Eulenspiegel [...] wurde dort wieder ein Bäckergeſelle. (S. 170)
原文ではいずれも sein によって zornig, Bäckerknecht という状態が表現されているのに対し、現代語ではこれを、その状態への変化という形でとらえている。(原文：Lindow, Wolfgang: Ein kurzweilig Lesen von Dil Ulenspiegel. Stuttgart 1966, 1978. / 現代語訳：Sichtermann, Siegfried H.: Hermann Bote. Ein kurzweiliges Buch von Till Eulenspiegel aus dem Lande Braunschweig. 2. Aufl. Frankfurt a. M. 1981.)

- 16) 塩谷 饒：「ルター聖書のドイツ語」クロノス S. 69 f.
- 17) Deutsche Bibelgesellschaft: Die Bibel (nach der Übersetzung Martin Luthers) Stuttgart 1975. Das Neue Testament: S. 64.
- 18) Reinhard Baumann: a. a. O., S. 127.
- 19) 鈴木直志：a. a. O., S. 48 ff.
- 20) Reinhard Baumann: a. a. O., S. 194 f.
- 21) 藤代幸一、岡田公夫、工藤康弘：「ハンス・ザックス作品集」大学書林 1983. S. 7.
- 22) diser が心理的な近さという観点から用いられた可能性もある。
- 23) werfen の場合、würfe と werfe との混同を避けるために würfe の形が定着した可能性も考えられる。
- 24) ここにも diser が直前にある「後者」ではなく「前者」を受けている例が見られる。

上記以外の参考文献

- Baufeld, Christa: Kleines frühneuhochdeutsches Wörterbuch. Tübingen 1996.
Ebert/Reichmann/Solms/Wegera: Frühneuhochdeutsche Grammatik. Tübingen 1993.
Götze, Alfred: Frühneuhochdeutsches Glossar. 7. Aufl. Berlin 1967.
Lexner, Matthias: Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch. 38. Aufl. Stuttgart 1992.
Paul, Hermann: Deutsches Wörterbuch. 10. Aufl. Tübingen 2002.
伊東泰治 他：「中高ドイツ語小辞典」同学社 1991.
工藤康弘・藤代幸一：「初期新高ドイツ語」大学書林 1992.
関口存男著作集 翻訳・創作篇 2・3・4：「阿呆物語」三修社 1994.

キーワード：初期新高ドイツ語 滑稽話 傭兵 民衆本 ドイツ文学

Keywords：Frühneuhochdeutsch, Schwank, Landsknechte, Volksbuch, Deutsche Literatur